

古館農業体験農園の取組状況と 盛岡市市民の農業体験農園の意向



令和2年12月

紫波町産業部 産業政策監

目 次

はじめに	1
第1章 古館農業体験農園の取組状況	
1 農業体験農園とは	
(1) 農業体験農園の仕組み	3
(2) 農業体験農園の歴史と現状	3
2 紫波町の農業体験農園をめぐる情勢	
(1) 農業従事者の高齢化	5
(2) 非農家の増加	5
3 古館農業体験農園の実施結果	
(1) 実施内容	7
(2) 設置コース及び運営方法	
①設定コース	8
②設定コース	8
(3) 活動経過	9
4 参加者の動機と感想	
(1) 地域別参加状況	10
(2) 参加した動機	11
(3) 参加した感想	12
5 得られた成果	15
6 運営上の課題と対応策	16
7 農業体験農園における農医介護連携	17
8 今後の展開方向	
(1) 産直の直営農場設置	18
(2) 農業体験農園の多面的機能の発揮	20
第2章 盛岡市市民の農業体験農園の意向 ～ アンケート調査結果から ～	
1 目的	21
2 調査方法	22
3 結果	23
4 考察	26
あとがき	27

はじめに

紫波町では、農業就業者の高齢化と新規就農者の減少により農業の担い手不足が進んでおり、今後もこの傾向が続くと離農等により供給されてくる農地が需要を上回り大量の農地が利用されなくなる恐れがあります。

このため、産業政策監調査研究報告第1号「紫波町認定農業者の定量的分析と農地の需要見通し」では、認定農業者の経営改善計画の目標面積を集計し、農地の需要量を明らかにしてきました。

産業政策監調査研究報告第2号「紫波町の農業経営体の予測と農地の需要面積」では、「AIによる農業経営体数予測モデルに関する研究」（農業情報研究センター 寺谷諒）から提供された紫波町の離農経営体数と離農により供給されてくる農地面積と第1号の農地の需要量から、将来の農地の需給状況を明らかにしました。また、将来、多量に供給されてくる農地を有効活用するために紫波町で取り組んでいる3つのリーディング・プロジェクト「①子実用トウモロコシの産地化」、「②地域の農地を一元的に管理する一般社団法人の設立」、「③農業体験農園の設置」を紹介してきました。

本稿では、リーディング・プロジェクトとして位置づけている古館農業体験農園の取組状況と盛岡市市民の農業体験農園に対する意向調査結果をとりまとめています。

本稿の構成と要約は以下の通りです。

第1章では、紫波町における農業体験農園を巡る情勢を整理するとともに先行的に取り組んでいる古館農業体験農園の実施内容、得られた成果、運営上の課題と今後の展開方向をまとめています。

農業体験農園の参加者は、先行研究から30km以内の盛岡市～花巻市のエリアが想定されます。このエリアの農業就業比率は、6%と非農業者が多く農業体験農園の事業化の可能性が高まっていると考えられます。

古館農業体験農園を実践した結果、得られた成果は、①野菜づくりと農家への理解促進、②食育の推進、③遊休農地の有効活用、④交流促進、⑤コロナ禍での余暇提供、⑥農医介護連携でした。

第2章では、農業体験農園についての研究成果として、農研機構東北農業研究センター稲葉修武氏が「盛岡市市民の農業体験農園の意向 ～ アンケート調査結果から ～」をまとめています。

アンケート回答者の76%は、農業体験農園に関心があり、トマト、キュウリ、ナス、ジャガイモ、エダマメの夏野菜のニーズが強くなっています。また作業の指導や生産資材の準備はしてほしいが、ある程度自由に作付けを決定したいというニーズもあります。農業体験農園の一月当たりの利用金額では、2,619円が理想価格となっていました。

盛岡市市民の農業体験農園の意向は、紫波町で農業体験農園事業を行う場合の参考になります。

具体的な農業体験農園の設置運営にあたっては、以下の参考資料をご覧ください。

<参考になる図書>

- 『市民参加の経営革命 農業体験農園の開設と運営 改訂版』
著者 特定非営利活動法人 全国農業体験農園協会編
発行 全国農業委員会ネットワーク機構 一般社団法人 全国農業会議所
内容 農業体験農園を開設、運営するために必要なことが詳しく具体的に記載されているマニュアル的な本です。
- 『しあわせも収穫する 農業体験農園』
著者 成清禎亮 川口進 佐藤弘 共著
発行 不知火書房
内容 プロの農家の手ほどきを受けながら、30平方メートルほどの自分の区画で年間30～40種類の野菜を栽培する体験型農園が広がっています。
農業体験農園で収穫するのは、家族だけでは食べきれないほどの新鮮で安全な野菜と笑顔です。
「菜園カルチャースクール」ともいわれるこの農園の魅力と、新たな農業の未来を開く可能性について報告されています。

<参考になるホームページ>

- 全国農業体験協会ホームページ <http://nouenkyoukai.com/>
- 愛知県ホームページ
ホーム > しごと・産業 > 農林水産業 > 農業 >
農業者の皆様へ（農業体験農園を始めませんか）
<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/nogyo-keiei/0000067417.html>
ホームページから以下の資料をダウンロードできます。
『農業体験農園開設の手引き ～新たな農業経営形態への挑戦～』
<農業体験農園ビジネスモデル育成資料>平成24年2月 愛知県農業総合試験場

第1章 古館農業体験農園の取組状況

1 農業体験農園とは

(1) 農業体験農園の仕組み

農業体験農園は、プロの農業者の指導の下に参加者が同じ野菜を栽培するものです。

このため主催者側で栽培計画を作成し、肥料、種、苗を準備し、播種時や定植時に合わせて定期的な講習会を開催します。

また、主催者と参加者の交流会も定期的に開催してコミュニティーづくりを進めていくものです。

(2) 農業体験農園の歴史と現状

農園利用方式による農業体験農園は、神奈川県で1991年に設置された「農園モデル」、それを発展させた1992年の「栽培収穫体験ファーム」が発祥とされています。

その後、神奈川県の例を参考に1996年に東京都練馬区で「緑と農の体験塾」（加藤義松）が設置され、農業体験農園が本格的に普及しはじめました。

平成29年時点での農業体験農園の設置状況は以下の通りです。

東京都：練馬区・調布市など91農園

関東：茨城県・埼玉県など25農園

九州：福岡県を中心に13農園

その他：京都府・和歌山県など12農園 計140農園

近年は、大都市を中心に民間企業も農業体験農園と同様の事業を行っています。

農業体験農園は、これまで東京等の大都市を中心に展開されてきましたが、地方の都市でも非農業従事者や非農家世帯が増加し、農業体験農園を展開できる可能性が高くなってきています。

表1 民間企業の農業体験農園の設置状況

企業名	概要	
株式会社マイ ファーム	エリア	関東・東海・関西・中国・九州
	農園数	100 か所
	利用料	1区画 15 m ² 、月額 3000 円～ 6000 円
	特徴	「自産自消」＝「自分たちでつくり自分たちで食べてみる」を理念に掲げ、マイファーム体験農園を展開しています。 農園に「自産自消アドバイザー」を置いて野菜栽培の指導を行っています。
株式会社アグ リメディア	エリア	首都圏・関西
	農園数	99 以上
	利用料	1区画 6～13 m ² 、月額 8000 円～ 10000 円
	特徴	農家の高齢化、担い手不足で管理できなくなった遊休農地を、だれでも気軽に農業と触れることができる「シェア畑」として再生しています。利用者数、約 2 万 5 千人。 農園に「菜園アドバイザー」を置いて野菜栽培の指導を行っています。

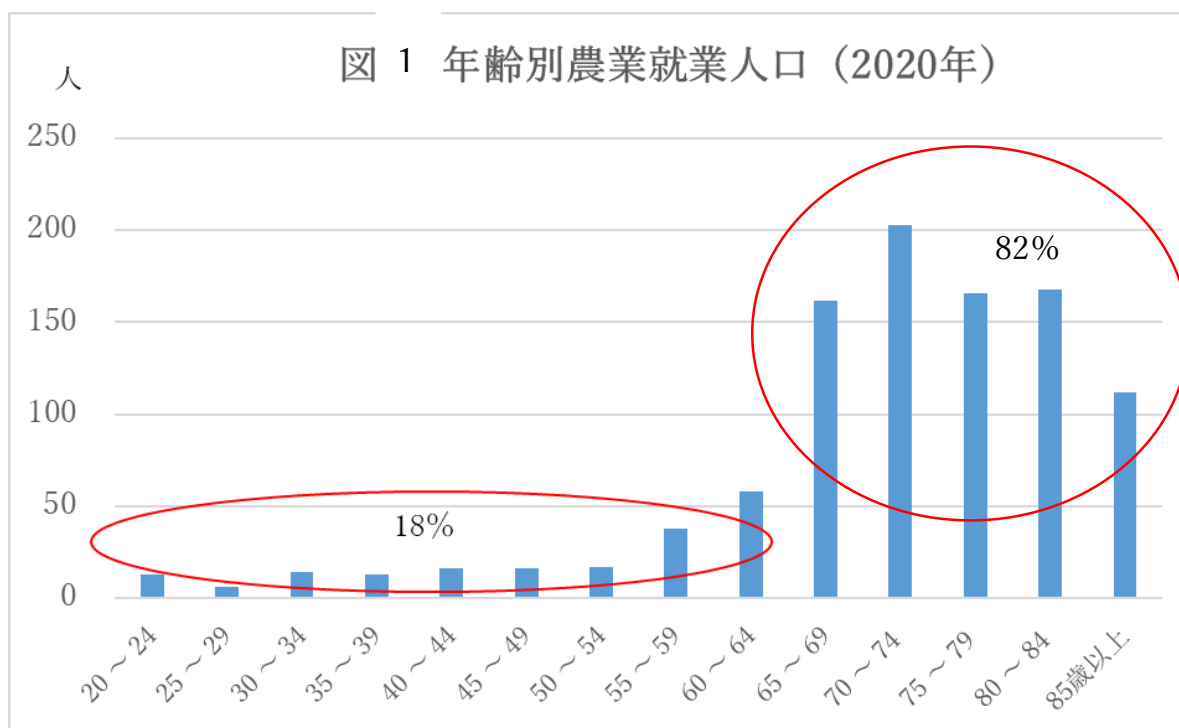
出典：両社ホームページより作成

2 紫波町の農業体験農園を取り巻く情勢

(1) 農業従事者の高齢化

紫波町の農業従事者の高齢化が進み、65歳以上が870人で82%を占めており、70～74歳が最も多く、64歳以下の農業従事者は191人で18%となっています。

今後、高齢化の進展とともに高齢農業者がリタイアし、新規就農者の確保が進まない場合、農業従事者は急激に減少していくと見込まれます。仮に新規就農者が確保されないまま高齢化が進むと2030年には、74歳以下の農業従事者は、2020年の18%になります。



注：2015年の農林業センサスの年齢別農業就業人口の年齢に5歳加えた年齢としています。

(2) 非農家の増加

先行事例から農業体験農園の参加者は、30km圏内とされています。このため紫波町の農業体験農園は、盛岡市～花巻市のエリアからの参加者が想定できます。

盛岡市～花巻市の市町（盛岡市、矢巾町、紫波町、花巻市）の就業者に占める農業の比率は、紫波町が15%と最も高く盛岡市が3%と最も低くなっています。盛岡市～花巻市の市町を合計した農業比率は6%となっています。

農業体験農園を利用する可能性のある農業を除いた15歳以上の就業者数は、盛岡市～花巻市の市町合計で209,945人となっています。

なお、紫波町は、盛岡市や花巻市への通勤・通学が多く、昼夜人口比率は81.6%と県内で最低で県内で紫波町が最もベッドタウン化しています。

表2 盛岡市～花巻市エリアの産業別就業者数（平成27年国勢調査）

市町村名	15歳以上就業者数 (人)	産業大分類別就業者数			昼夜間人口比率 (%)
		農業、林業 (人)	うち農業 (人)	農業比率 (%)	
盛岡市	143,723	4,775	4,544	3%	105.7
矢巾町	13,922	1,237	1,227	9%	104.0
紫波町	17,209	2,520	2,499	15%	81.6
花巻市	49,218	6,002	5,857	12%	96.1
周辺市町計	224,072	14,534	14,127	6%	

盛岡市～花巻市エリアの人口総数は、455,625人で、一般世帯数は、183,758世帯です。このエリアの一般世帯のうち、子どもとの食育を目的に農業体験農園に参加が見込まれると考えられる「夫婦と子供からなる世帯」は、44,037世帯あります。

また、健康、生きがいを目的に農業体験農園に参加が見込まれると考えられる「高齢夫婦世帯」は、18,009世帯で上記世帯と合計すると、参加が見込まれる世帯は62,046世帯になります。

農業従事者が減少し、非農業従事者が増加している盛岡市～花巻市のエリアは農業体験農園が事業化できる可能性が高まってきていると考えられます。

表3 紫波町周辺市町の世帯数（平成27年国勢調査）

市町村名	人口	世帯数					
	総数 (人)	一般世帯数 (世帯)	うち 核家族世帯 (世帯)	うち 夫婦のみ の世帯 (世帯)	うち 夫婦と子供 から成る世帯 (世帯)	(再掲) 高齢夫婦 世帯 (世帯)	(再掲) 3世代世帯 (世帯)
盛岡市	297,631	129,420	66,640	24,336	30,823	12,431	7,546
矢巾町	27,678	9,874	5,440	1,810	2,779	813	1,232
紫波町	32,614	10,793	6,174	2,019	2,977	1,116	1,931
花巻市	97,702	33,671	16,988	5,946	7,458	3,649	6,161
周辺市町計	455,625	183,758	95,242	34,111	44,037	18,009	16,870

3 古館農業体験農園の実施結果

(1) 実施内容

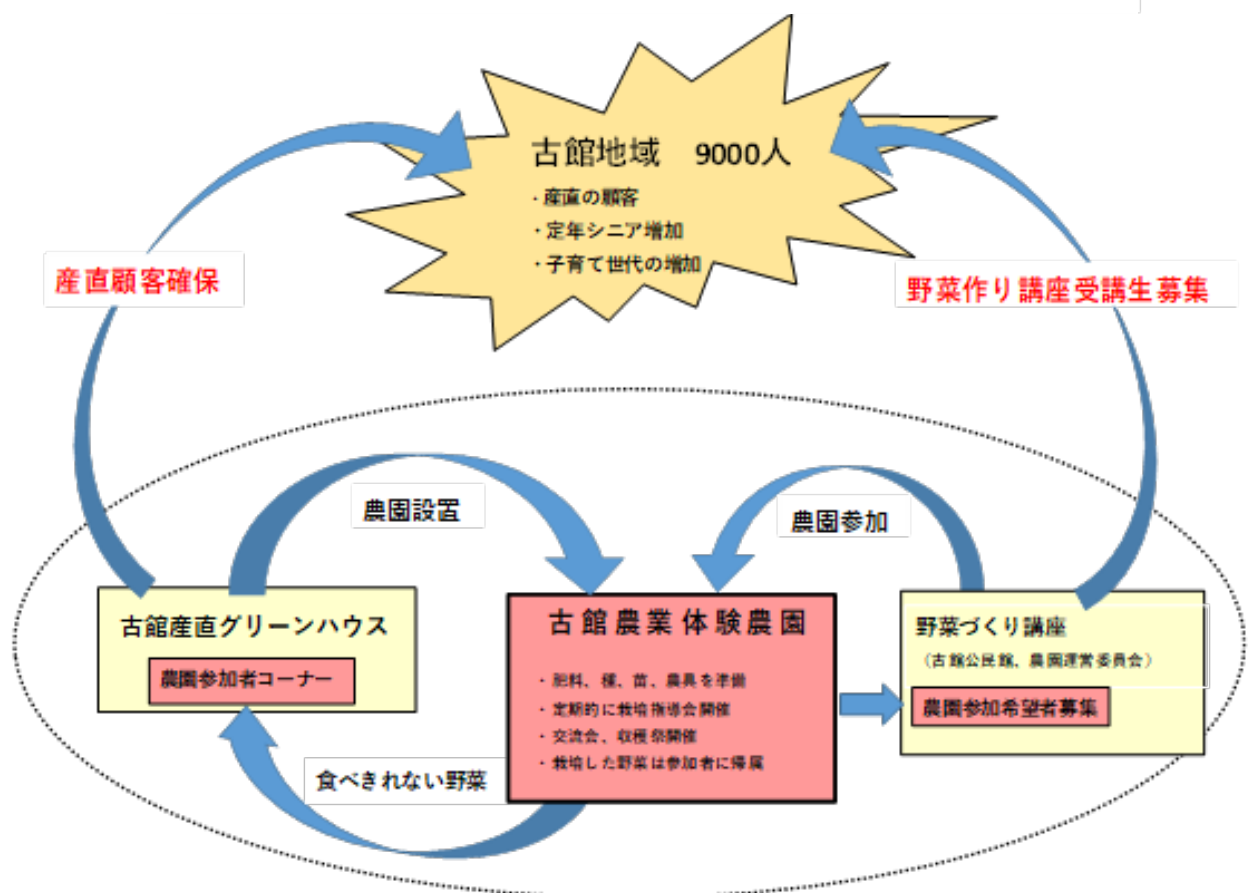
古館産直センターは、組合員の高齢化により近年販売額が減少してきており、いかにして出荷量を確保していくかが課題となっています。一方、古館ニュータウンができた頃に移住してきた住民は、定年退職を迎える時期を迎えており、毎年多くの定年退職者が発生し、今後とも退職者の増加が見込まれます。

定年退職者の中には余暇を活用して、家族への安全安心な野菜の提供したいニーズもあります。

また子育て世代では、親子で野菜作りを体験してみたいというニーズもあります。

このため、古館産直組合が「古館農業体験農園」を設置し、定年退職者等の野菜作りを通じた生きがい対策や子育て世代の食育活動を行うとともに、将来的な産直への出荷者の確保につなげるものです。

図2 古館農業体験農園の概念図



(2) 設置コース及び運営方法

①設置コース

令和2年度に古館農業体験農園で設置したコースは、おまかせコースと自由作付コースの2コースでしたが、参加者14名は全員おまかせコースを選択し、うち3名はおまかせコースと自由作付けコースを合わせて実施しました。

表4 令和2年度に古館農業体験農園で設置したコース

コース名	内 容	
おまかせコース	主催者	肥料、種、苗を準備し栽培講習会を開催 (店で手に入りにくい珍しい品種の苗を春作と秋作の分を準備します)
	参加者	各自で区画の栽培管理実施(除草、灌水、収穫)
	利用料	1区画5000円 複数区画申し込み可
自由作付コース	主催者	畑を耕起し各自の区画を準備
	参加者	各自で肥料、種、苗を購入し栽培管理実施
	利用料	1区画2000円 複数区画申し込み可

②運営方法

- 主催者で用意するもの
 - ・講習会で一斉に作業するときの農具(クワ、移植ゴテ、ジョウロ等)
- 参加者が各自で用意するもの
 - ・農作業に適した服装(帽子、タオル、手袋、長靴等)
 - ・飲み物(水、お茶等)
 - ・除草道具、収穫はさみ等
- 講習会の開催日と連絡方法
 - ・講習会を欠席する場合は、事務局までご連絡します。当日の作業は出席している会員で実施します。
 - ・雨天等で講習会の作業できない場合は、事前に事務局から連絡網で連絡します。原則的には翌週の日曜日に延期します。
 - ・草取りなどの日常の管理と収穫は、各自都合のいいときに実施してください。
 - ・基本的に農薬は散布しませんが、キャベツ、ハクサイに虫が多発した場合には事務局で農薬を散布します。
 - ・参加者の連絡網を作って情報伝達を効率化します。
 - ・講習会の開会通知や日程の変更は連絡網でお知らせします。

(3) 活動経過

古館農業体験農園は、企画から本格実施までに約1年間要しています。

令和元年の夏に企画・実施要領を作成し、秋作から試行を開始、令和2年の春作から本格実施しています。

具体的な活動経過は以下のとおりです。下線が参加者と一緒に行った活動で、それ以外は運営スタッフが実施した内容です。

<令和元年度>

- 4/11 古館産直の課題と今後のあり方検討
(産直組合長と産業政策監との意見交換→産直サポート農園)
- 4/15 古館産直と古館公民館の打合わせ
(産直サポート農園と古館公民館の連携可能性)
- 5/16 古館産直サポート農園設立打合わせ
- 7/1 農園設立打合わせ
- 7/18 農園設立打合わせ
- 7/23 野菜作り講座開催(古館公民館)、農園募集告知
- 8/8 講習会(秋野菜定植)
- 11/7 農園打合わせ
- 11/21 古館産直サポート農園収穫祭(古館公民館)
- 12/6 紫波町図書館野菜づくり講座(農園紹介、参加者募集告知)
- 1/10 古館公民館野菜づくり講座打合わせ(古館公民館、運営スタッフ)
- 1/24 古館公民館野菜づくり講座開催(農園紹介、参加者募集告知)
- 2/7 農園設置打合わせ
- 3/4 農園設置準備
- 3/11 農園設置場所整備
- 3/20 古館農業体験農園参加者説明会
- 3/31 農園設置準備(苗鉢上げ)

<令和2年度>

- 4/15 農園設置準備(石灰散布)
- 4/20 農園設置打合わせ
- 4/23 農園設置準備
- 4/26 講習会(たい肥散布、畦立て)
- 5/1 農園設置準備
- 5/3 講習会(葉菜類定植、根菜類播種)
- 5/10 講習会(果菜類定植)

- 5/11 お茶会打合わせ（地域おこし協力隊）
- 5/19 お茶会打合わせ（みんなの健康ラボ、地域おこし協力隊）
- 5/22 農園設置準備
- 5/24 講習会（果菜類定植）、お茶会
- 5/26 農園作業（直営部分）
- 5/27 農園作業（直営部分）
- 5/28 農園作業（直営部分）
- 6/4 農園設置打合わせ
- 6/14 講習会（葉菜類収穫時期、果菜類定植）
- 6/22 農園作業（休憩場所）
- 7/12 講習会（秋作用葉菜類の播種）
- 8/2 講習会（ハクサイ、レタス定植）
- 8/30 講習会（大根播種）、交流会
- 9/15 カボチャ収穫
- 10/4 交流会（芋の子汁）

4 参加者の動機と感想

（1）地域別参加状況

参加者 14 名の居住地は、紫波町 11 名（78%）、うち古館 7 名（50%）盛岡市 3 名（21%）でした。

当初古館ニュータウンからの参加を想定しましたが古館地区からの参加は 50%にとどまり、古館以外の紫波町内が 28%、盛岡市が 21%と広範囲からの参加となりました。

東京都における先行研究では、農業体験農園の通作範囲は 30 km とされていますが、古館農業体験農園でも約 15 km 離れた盛岡市からの参加者がありました。

盛岡市からの参加者は、週一回程度の作業でしたが、距離は特に支障はなかったと述べています。

また盛岡市からの参加者は、盛岡市では同様の取組が無いため紫波町まで来たということでした。

(2) 参加した動機

農業体験農園の最初の説明会で参加動機を聞いたところ以下の通りで様々な動機で参加していました。

男性の場合、安全、新鮮な野菜をうまく栽培したいという動機が多く、女性の場合は、野菜を作るという動機のほかに、子供と野菜を作る、知り合いを作るといった動機もありました。

<男性の動機>

- 【紫波町男性】 昨年試行した農業体験農園に参加したら少ない経費で多くの収穫ができた。
- 【紫波町男性】 昨年試行した農業体験農園に参加したら野菜栽培がうまくいった。
- 【紫波町男性】 以前の職場で上司から畑を借りて野菜を作っていた。10月に仙台から移住した、紫波町にきたのでぜひ畑をやりたい。
- 【紫波町男性】 退職になるので新鮮な野菜を作ってみたい。
- 【紫波町男性】 120㎡の畑をやっているが野菜作りを体系的に学びたい。
- 【盛岡市男性】 食の安全を気にしている。安全な野菜を作りたい。

<女性の動機>

- 【紫波町女性】 農家出身で無いので子供に野菜を作るところを見せたい。
- 【紫波町女性】 実家は農家だったが自分では野菜を作ってこなかったので自分で作ってみたい。
- 【紫波町女性】 札幌から引っ越してきたが、紫波町には自分の知り合いがいない。農業体験農園に参加すれば知り合いが増えると思った。
- 【盛岡市女性】 盛岡で生まれ育った。農業体験農園に参加して本格的に野菜を作ってみたい。

(3) 参加した感想

10月に開催した交流会の場で参加者に農業体験農園に参加した感想や改善点を聞いたところ次のような内容でした。

よかった点には○、改善すべき点については×を付けています。

<男性の感想>

【紫波町】

- 野菜を育てるのが大変だと分かった。
- ×野菜を作って食べるというよりは交流会を多くして欲しい。交流会に名札を着用すれば交流しやすい
- ×収穫のタイミングが分からなかった。大きくなったら取ろうとしていたら大きくなりすぎた。
- ×トマト、ナスが最終的にどれくらいの草丈になるかわからず、支柱が準備できなかった。

【紫波町】

- 農業体験農園に参加してよかった。ミニトマトの実がたくさん採れるのが分かった。ナスにも多くの種類があるのが分かった。
- ×カブなどの土物の収穫時期が分からなかった。

【紫波町】

- ・農業体験を通じて地域との結びつきを深めようと思って古館体験農園に参加した。
- ・当初の農業体験のイメージは、指導者はなく、それぞれに好きな農作物を自己流で育てるものと思っていた。
- 最初の説明会のときに古館体験農園のコンセプト図を見て農業を中心とした地域のつながりの醸成や、生産消費の循環システムの促進が謳われていたので驚いた。
- 移住一年目として地域に愛着を感じて始めていた自分としては、農業を体験すること以上に、その地域の輪の中に入れることに喜びと期待を感じた。
- 農業体験農園では、予想をはるかに超えて、農業の楽しさ、地域の結びつきがあって楽しかった。
- 農園代表者との連携で、生産した野菜を高齢者福祉施設に配送する役割も得ることができたことは、いままでの消費者の立場から生産者の立場に転じるきっかけになった。これこそは、古館体験農園が産直会員数の減少に歯止めをかけようとする目的にかなっている。

- 今年の夏はとても暑かったですが、お互いに声をかけあったので夏バテや熱中症に見舞われることもなく美味しい野菜を食べきれないほど味わい、幸せをたくさん感じた。
- with コロナの時代でも、人や地域とのつながりを保つことは地域経済や生活の豊かさに必要不可欠。
- 古館体験農園のような広々とした空間でこそつながりを醸成できると強く感じた。
- このような取組が紫波町に広まることを願います。

【盛岡市】

- 盛岡市の公民館で古館公民館の野菜づくり講座を知って出席した。野菜作り講座を受講しそのまま農業体験農園に参加した。
- 盛岡市から通ったが特に問題はなかった。
- コロナ禍の中で畑に来て作業することが出来て楽しかった。主催者に感謝する。
- ×農業体験農園は作業の説明だけだったが、もう少し栽培技術に関する説明が欲しかった。
- ×施肥量、トマト・ナスの整枝選定方法に関する資料を使って講習会をやって欲しい。

<女性の感想>

【紫波町】

- 野菜作りは手間がかかるが楽しかった。産直に出ている野菜にもこんなに手がかかっているのだと分かった。
- 子供がおおきくなったら、少し本格的に野菜を作りたい。
- 体験農園は仲間がいるので楽しい。畑での会話、交流会でのコーヒーの話もよかった。
- ×今年は作業時間が取れなかった。

【紫波町】

- 子供に野菜を作るのを見せたいと思い参加した。子供が野菜を作って食べるという一連の楽しさを経験できた。子供にとって小さい苗が成長する。ピーマンの実が大きくなるのが面白かった。
- 畑で会話したり収穫した野菜をもらったりして交流ができた。
- ×面積は広すぎて管理が大変だった。1世帯での利用では大きすぎて食べきれない。
- ×品種が多すぎてわかりにくい。講習会では定植する苗や位置を紙に書いて説明してほしい。
- ×珍しい野菜を栽培するのはいいが収穫時期や調理方法が分からない。

【紫波町】

- 自分で野菜を作ってみたくて参加した。簡単に手軽にいろんな野菜が作れて楽しかった。
- 野菜づくりは難しいというのが分かり、産直の野菜は安すぎると思うようになった。
- 畑が人と知り合う場になってよかった。自分の居場所、気分転換できる場所でリフレッシュできた。
- 昼休み時間に畑に来て弁当を食べたこともある。
- 農業体験農園の話をするに関心を寄せる人が多かった。
- ×野菜を収穫するタイミングが分からなかった。
- ×掲示板、伝言板、スタッフと参加者の交換日記のように活用できる掲示板があればいい。
- ×会費が安すぎる。スタッフに大きな負担がかかっている。

【盛岡市】

- 野菜を作る勉強をしようとして参加した、もっと野菜作りを深めたい。
- 面積的にはこの程度でいい、世話ができる程度の大きさを運動にもなる。
- 畑のわきにブランコがあったので子供がブランコで遊んでいるうちに畑作業に没頭してきた。
- 新鮮な野菜を生産しているという安心感があった。
- フラッと畑に来て誰かがいて会話が出来てよかった。
- 暮らしに潤いが出来た。畑で楽しい時間が過ごせて食べ物があるという安心感が味わえた。米、大豆も作ってみたい。
- 盛岡からでも農園の管理は可能であった。
- ×当初掲示板に収穫時期、作業日程の告知をするということだったが実行されなかった。

【盛岡市】

- 盛岡市には農業体験農園がないので、ラジオ放送を聴いて紫波町の農業体験農園に参加した。
- 参加して大変良かった。来年もぜひやってほしい。

5 得られた成果

古館農業体験農園の実践を通じて多くの成果が得られました。項目的に上げると以下のとおりです。

表 5 農業体験農園で得られた成果

項 目	具 体 的 な 内 容
野菜作りと農家への理解促進	<p>実際に野菜を作ってみて楽しいということと作業が大変だということが理解された。</p> <p>産直で販売されている野菜に多くの手がかかっていることが分かり、価格が安すぎるという感覚を持つようになりました。</p>
食育の推進	<p>当初古館ニュータウンの定年退職者の参加を見こんでいましたが、子育て世代の親子が野菜作りを体験するために参加した方もいて、食育の推進につながりました。</p>
遊休農地の有効活用	<p>農園の周辺の農家から利用せず遊休化している農地を使ってくれるよう要望があり、当初 10a の農園面積が直営部門を含めて最終的に約 50a に拡大したことにより、遊休農地の有効利用につながりました。</p>
交流促進	<p>仙台や札幌から移住してきて知り合いをつくることを目的に参加する方もあり、地域の交流促進につながりました。</p>
コロナ禍の余暇提供	<p>農業体験農園は野外作業で感染の危険が少なく、外出自粛にも該当しないことから、利用者は畑で充実した余暇を過ごすことができ、利用者から感謝されました。</p>
農医介護連携	<p>医療関係者（医師、看護師）が、農園と一緒に野菜を作ったことにより、交流会でコーヒーと健康の話題提供をしていただいたり、農園代表者の野菜を医師が関係するグループホームへ直接販売するなど農医介護の連携が進みました。</p>

6 運営上の課題と対応策

古館農業体験農園を1年間運営した結果生じた課題と次年度に向けた対応策を整理すると以下のとおりです。

表6 古館農業体験農園の運営上の課題と対応策

項目	課題	対応策
参加者募集	・農業体験農園の認知度が低く当初の締め切り時点での申込者は低調だった。	・農業体験農園の仕組みを理解してもらうためのシンポジウム等を開催する。
講習会	・作業内容を口頭のみで説明したために理解しにくかった。 ・講習会では作業内容のみ説明し栽培技術の説明をしなかった。 ・収穫時期が分からなかった。	・講習会では、栽培技術と作業内容について資料を配布して説明する。 ・収穫時期を掲示板等で知らせる。
交流会	・交流会の評価は高かったが、事前の計画がなかった。	・交流会の日程と内容の年間計画をあらかじめ立てておく。
掲示板	・農園に掲示板を設置し講習会日程や作業内容を掲示する計画であったが実施できなかった。	・農園に掲示板を設置してお知らせする。
区画面積	・当初の1区画の面積を40㎡で開始したが、最終的に参加者1人当たり50㎡に拡大したため管理に多大の労力を要した。	・1区画の面積を全国の一般的な面積の30㎡程度に縮小する。
野菜品種	・葉菜・根菜をそれぞれ複数品種作付けたため、同じ種類の野菜が多くなり消費しきれなかった。	・品目毎の品種数を減らし品目数を増やす。
利用料金	・令和2年度は、利用料金を資材代の5000円としたが、経費が増高し、1000円追加徴収した。	・令和3年度から利用料金を上げる。
産直出荷	・食べきれない野菜を産直に出荷する計画だったが、産直への出荷方法を決めるのに時間を要し、出荷に至らなかった。	・令和3年度は作付時から出荷方法を周知する。

7 農業体験農園における農医介護連携

農業体験農園に参加している医師の杉山賢明氏が日本プライマリケア連合学会東北ブロック学術集会で以下の報告をしました。農業体験農園が単なる野菜作りにとまらず、農医連携を進める場となることが期待されます。

農医介護連携による野菜「処方」"farmacy"に関する活動報告

杉山賢明^{1,2}、坪谷透^{1,2}

¹医療法人社団帰厚堂こずかた診療所、²一般社団法人みんなの健康らぼ

【背景】高齢者において生じやすいポリファーマシーはプライマリ・ケア医が適切に介入すべき課題の1つである。しかし、実際には患者の疾患に対する解釈モデルや処方に対する満足感などが影響するため、減薬が難しいことも少なくない。当院では、患者・医師双方が利するように、減薬とともに野菜を「処方」する活動"farmacy"を行ったので紹介する。

【方法】演者らがかかりつけ医となっている利用者20名が入居するグループホームに2020年5～7月野菜を提供（以下「処方」とする）した。具体的には、演者が地域活動の一環として農業指導を受けている生産者を野菜仕入れ先として、グループホーム管理者に紹介した。演者は出退勤中に生産者の収穫した無農薬野菜を、グループホームに運搬した。演者が自ら収穫した野菜をグループホームに「処方」することもあった。

【結果】同期間中、毎週約20種類の野菜を「処方」した。グループホーム利用者・職員ともに新鮮な無農薬野菜を食することができ、その喜びを生産者との交換日記で表現するように依頼したところ、利用者・職員の笑顔が10ページに渡って描写された。この間に減薬できた利用者は16名であった。

【考察】この野菜処方によって三方よしの世界を実現できた。すなわち、出荷量が小さい生産者は安定した供給先を確保できた。また、包装袋が不要であったため、出荷コストを削減でき、エコフレンドリーでもあった。一方、グループホームは本来高価な無農薬野菜を安価に仕入れることができた。社会疫学的には社会経済的地位によって野菜消費量に差がみられるが、今回の取り組みは格差是正に結びつきうることが示唆された。また、野菜の仕入れにかかる職員の労働時間を削減でき、シェアリングエコノミーの実現可能性もみられた。

「処方」した医師（演者）は診療だけでは味わえない満足感を得た。これは半農半X（ここでは半農半医）の体現であり、医師過疎地域における地域医療の魅力として発信できることが示された。

多くの高齢者が病気や障がいを抱えている現代において、世界保健機関の定義する「健康」そのものが目標ではなくなっている。むしろ、病気や障がいがあるうと、心豊かな生活を送れるような社会支援が求められる。その実現のためには、従来の医療介護従事者の連携の枠を超える必要がある。

【結論】今回の医師による野菜の「処方」"farmacy"は、ポリファーマシー解消につながるだけでなく、患者・介護従事者・医療者・農業生産者の有機的なつながりを醸成し、それぞれが単独で事業を行っていたときには生まれ得なかった、食の大切さ、会話の広がり、そこから派生する生活の豊かさ、地域で生きることの喜びを分かち合うことができた。



8 今後の展開方向

(1) 産直の直営農場設置

農業体験農園は、当初、古館産直の販売額の減少を食い止めるための「古館産直サポート農園」として考案されたものなので、産直の販売額の増加に結び付く内容の農園を目指しています。

令和2年の途中から約20aの直営農園分を設置し、産直の新商品を提案するため、食用ほうずき60本、かぼちゃ16品種120本、ズッキーニ4品種36本を植えてみました。

令和2年は、栽培管理が行き届かず産直への出荷までには、至りませんでした。来年度以降は、産直の直営農場として計画的な生産出荷をめざしています。

<直営農場のねらい>

- ・産直での計画的な生産出荷に貢献します。(品揃え拡充、端境期解消等)
- ・新たな商品提案のための栽培実証が出来ます。
- ・新たな販売方法の試行が可能になります。

(例) 畑の産直方式：消費者が畑に来て野菜を収穫して買っていく方式

C S A (地域支援型農業)：消費者の農業生産支援、会員制野菜直売

<農業医療介護連携による販路拡大>

今回農業体験農園に医療関係者参加したことにより農園代表者と福祉施設との間で野菜の直接取引が始まりました。これを産直の新たな販売先にできないか検討が進められています。

直接取引が広がれば、これまでの市場出荷と異なりいろんなメリットが出てきます。

○生産者のメリット

- ・市場流通する規格に合わせる必要が無いので生産と出荷調整作業が楽になります。
- ・小ロットでも取引が可能になります。
- ・出荷規格に合わずに廃棄する野菜が減少し、商品化率が向上します。
- ・包装資材が不要なので出荷経費が軽減されます。
- ・旬のものを供給することで無理な作型で生産する必要がなくなります。

○消費者のメリット

- ・安全安心な野菜を手軽に入手できます。
- ・地域内で生産された野菜を購入することで流通経費が軽減されるため野菜を安く入手できます。
- ・その日の朝収穫された鮮度のいい野菜を入手できます。
- ・市場に出回らない珍しい野菜も入手できます。

○社会のメリット

- ・地域で生産消費することで、広域流通にかかるエネルギーが削減され、温暖化防止に役立ちます。

(2) 農業体験農園の多面的機能の発揮

古館農業体験農園に、子育て世代の母親と医療関係者が参加したことで農業体験農園の持つ可能性が大きく広がりました。

古館農業体験農園の実践を通じ農業体験農園は、安全安心な野菜を育てて食べるという野菜生産機能と併せて以下のような多面的な機能を果たすことが分かりました。

今後以下の多面的機能をより発揮できるような仕組みづくりを強化する必要があります。

表7 農業体験農園が果たす多面的機能

機能名	果たしている機能の内容
食育機能	<ul style="list-style-type: none"> ・子供と一緒に野菜を作って、野菜の成長を観察できます。 ・子供が自分で作った野菜を食べることによって野菜が好きになります。 ・子供のころに野菜を食べる習慣をつけることにより将来の生活習慣病予防につながります。
健康増進機能	<ul style="list-style-type: none"> ・農作業で体を動かすことで筋力が維持されます。
遊園地機能	<ul style="list-style-type: none"> ・大人が大変だと思ふ除草作業も子供にとっては、草を引っこ抜くことが遊びになります。 ・大人では気が付かない畑にいるアリ、トンボ、芋虫、カエルを子どもは見つけて捕まえる遊びになります。 ・畑の土を使って泥団子を作ることが遊びになります。
リフレッシュ機能	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事を離れた新たな居場所になります。 ・仕事の合間に畑に来て農作業をしてリフレッシュできます。
コミュニティー形成機能	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的な栽培講習会や交流会を開催することにより、参加者が知り合いになります。 ・畑に来ると誰かと会話が出来ます。 ・みんなで同じ野菜を作るので、野菜の作り方を教えあったりして会話がはずみます。
世代間交流機能	<ul style="list-style-type: none"> ・リタイアしたシニアが農業体験農園に参加することにより、農園で孫と一緒に野菜づくりの作業をしたり野菜を収穫したりして世代間の交流が進みます。

第2章 盛岡市市民の農業体験農園の意向

～アンケート調査結果から～

1 目的

都市農業を指す指標の一つである都市的農業地域は、東北地域にも多分に存在し、農地の10%を占めています。2015年4月に施行された「都市農業振興基本法」では、都市農業の安定的な継続を図ることが明示されています。生鮮農産物の供給や、災害時の防災空間となることなど、都市農業の意義は小さくありません。しかし、高度経済成長期以降、都市農業・農地は縮小を続けている現状にあります。

本研究で取り上げる農業体験農園とは、農園の経営を行う農業者が作付計画を作成するとともに、農具や種苗、肥料、農薬、資材等を用意し、定期的に講習会を開催して、農園を利用する者に栽培方法などを指導する取組です。一方で、利用者は利用料金を前払いして播種・植え付けから収穫までの農作業を体験することが出来ます。東京都練馬区を先進地とする取組みです。

農園主対象の研究として、坂口（2003）は、農園が収益の向上につながることを明らかにしています。また、利用者対象の研究としては、山田（2006）は農園が利用者に及ぼす効果について解明しています。また、稲葉（2017）は、農業体験農園が利用者の農業理解の促進に貢献していることや、利用者が農園主の経営を支えていることなどを明らかにしました。これらの研究において、農業体験農園は都市農業の維持において重要な役割を果たすと考えられています。

これら、既存研究は主に三大都市圏の農業体験農園を対象とした分析でした。しかし、近年、成清（2014）が、指摘するように、「東京のような都市」以外の「地方」であっても、農業体験農園の開設がみられるようになってきました。同書では、「地方」での農業体験農園の運営では、利用者の確保が重要な課題であると述べていますが、以降の研究をたどっても、三大都市圏以外の農業体験農園のニーズは明らかになっていません。そこで、本研究では、岩手県盛岡市の一般市民を対象にアンケート調査を行い、農業体験農園のニーズを明らかにすることを目的とします。

岩手県盛岡市は、人口29万人の都市的農業地域・地方中核都市です。東北地域の地方中核都市においても、福島県いわき市に次いで2番目に農地面積が多く、稲・野菜・果樹など多様な農作物を生産しています。

2 調査方法

岩手県盛岡市の直売所「サン・フレッシュ都南」の利用客を対象に、対面式のアンケート調査を実施しました。回答者の属性を把握し、農業体験農園の取り組みについて、簡単に説明を行った後、以下の質問項目に回答を行っていただきました。

- a. 農業体験農園の取り組みへの関心の有無
- b. 農業体験農園の内容への希望
- c. 農業体験農園の1月当たりの利用希望金額
- d. 農業体験農園に期待すること

調査は2017年10月9・14日の2日間行い、計55件の有効回答を得ました。回答者の属性については、約70%が女性であり、年齢については、半数近い44.0%の回答者が60歳以上でした。

出身地については、約8割の方が、県内出身者であり、41.3%の回答者が、子・孫と同居しています。

表8 回答者属性

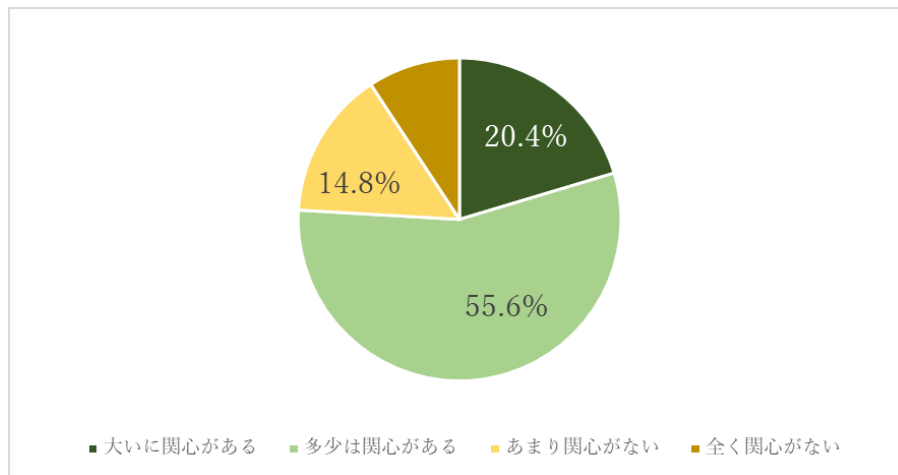
アンケートの調査方法	
調査対象	農産物直売所「サンフレッシュとなん」利用者
調査期間	2017年10月9日、14日
調査方法	直売所敷地内にて、対面式のアンケート調査
有効回答者数	55
回答者の属性	
性別	男性：29.1%，女性：70.9%
年齢	30歳未満：4.0%，30～40歳未満：14.0% 40～50歳未満：18.0%，50～60歳未満：20.0% 60～70歳未満：32.0%，70～80歳未満：12.0%
出身地	県内：78.4%，県外：21.6%
居住地域	盛岡市：83.3%，紫波町：5.6%，雫石町：3.7% 宮古市：3.7%，矢巾町：1.9%，埼玉県入間市：1.9%
同居（子・孫）	いない：58.7%，未就学児：15.2%，小学生：8.7% 中学生：10.9%，高校生：4.3%，高校生以上：17.4%

3 結果

まず、農業体験農園の取り組みへの関心について、図3にその結果を載せています。「大いに関心がある」、「多少は関心がある」を合わせて、76.0%の回答者が農業体験農園に関心を持っているということが明らかになりました。

表出はしていませんが、「大いに関心がある」と回答した方のうち、56%の方が「県外出身者」であり、岩手県外の出身者の多くが農業体験農園の取り組みに強い関心を持っているという可能性が示唆されております。

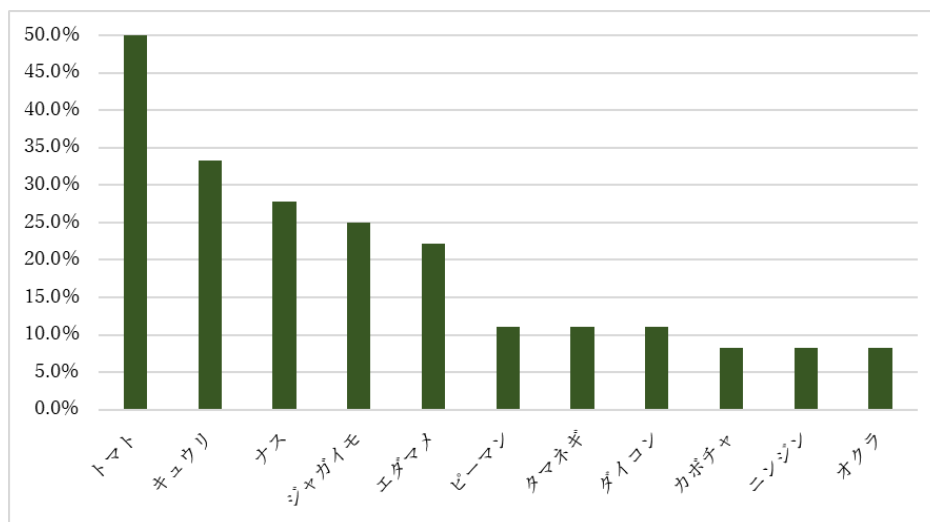
図3 農業体験農園の取り組みに関心はあるか (n=54)



次に、農業体験農園の内容への希望として、1点目に、栽培したい作物の希望について伺いました(図4)。「トマト」、「キュウリ」、「ナス」、「ジャガイモ」、「エダマメ」といった、夏野菜の栽培ニーズが強いことがわかります。

一方で、冬作物、もしくは年間を通して栽培する作物の希望がみられないことから、冬場に作業がある作物の栽培は想定されていないことがわかります。

図4 農業体験農園で栽培したい農作物 (n=36・複数回答可)

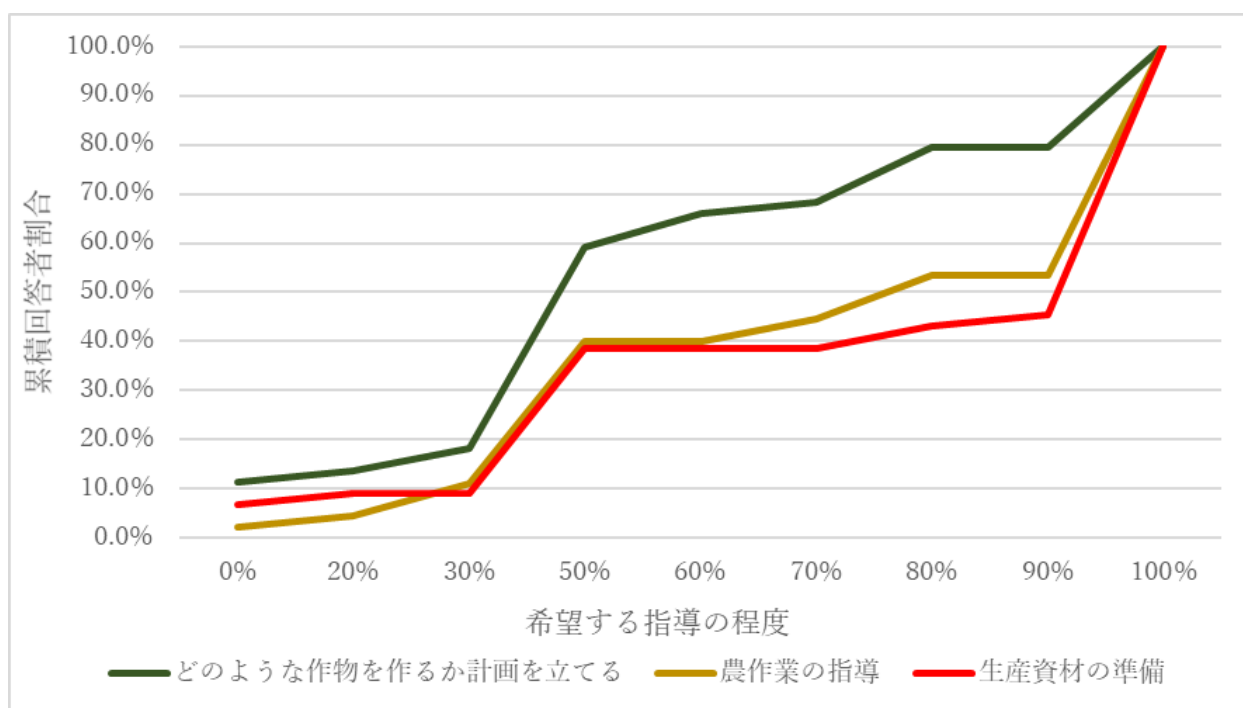


また、2点目に、農業体験農園を利用するとして、農業者にどの程度指導を求めるか、「①どのような作物を作るか計画を立てる」、「②農作業の指導」、「③生産資材の準備」、それぞれについて0~100%で回答してもらいました（例えば、①が100%の場合、農業者が全て栽培する作物を決めることを回答者が希望していることになります）。図5はその結果です。

縦軸に累積回答者の割合、横軸に希望する指導等の割合を載せています。②・③については、指導の割合が90~100%にかけて大幅に増えており、約50%の回答者が、農業者に作業の指導や生産資材の準備をすべて行ってほしいと希望しています。一方で、①については、指導の割合が50%以下、すなわち、半分以上は自ら栽培する農作物は決めたい、という方が、6割程度存在することが分かりました。

指導や生産資材の準備はしてほしいが、ある程度自由に作物を決定したいというニーズが存在することが伺えます。

図5 回答者が希望する農業者による指導の割合 (n=45)



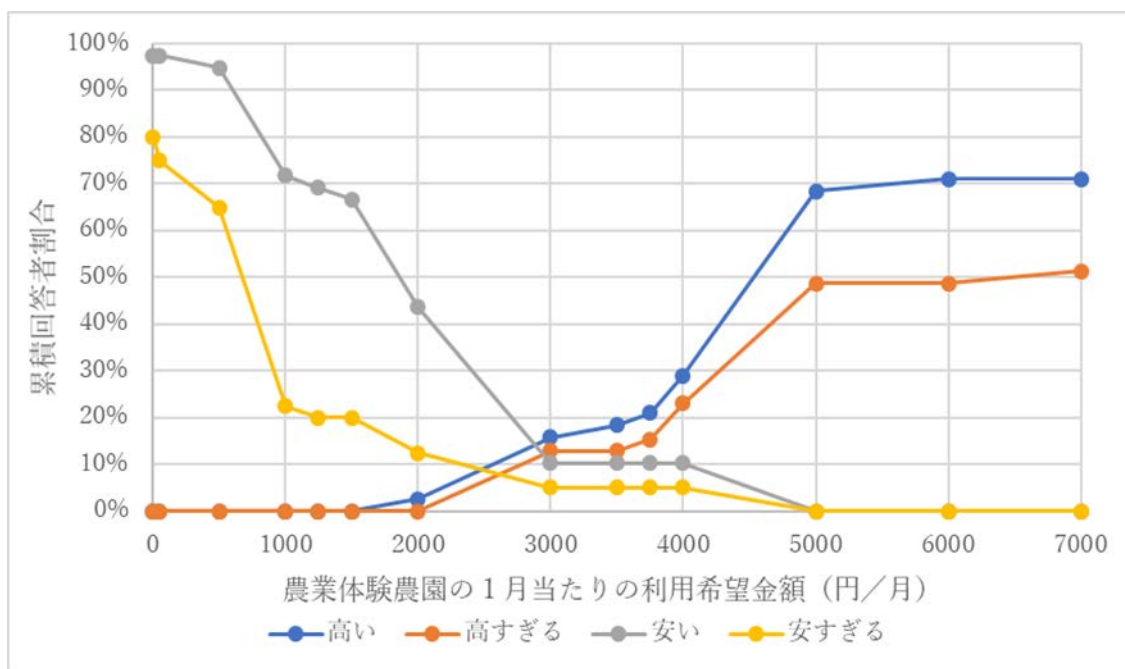
次に、農業体験農園の一月当たりの利用希望金額について、PSM分析をもとに把握しました（図6）。PSM分析とは、「Ⅰ. いくらくらいから高いと思いますか」、「Ⅱ. いくらくらいから安いと思いますか」、「Ⅲ. いくらくらいから高すぎて利用できないと思いますか」、「Ⅳ. いくらくらいから安すぎて質が疑わしいと思いますか」という質問をして、累積分布を取り、4本の曲線の交点を求め、基準の価格とするものです。

利用の可能性のある人が最も多いと考えられるⅢ・Ⅳの交点「理想価格」は、2,619円でした。

一方で、先進地である東京都練馬区の月額換算した利用料金である4,000円程度を「高い」と思う回答者は、3割程度であり、5,000~7,000円程度の利用料金でも「高い」と思わ

ない方も3割ほど存在することがわかります。これは、回答者によっては、支払いできると考える金額が大きく違うということです。

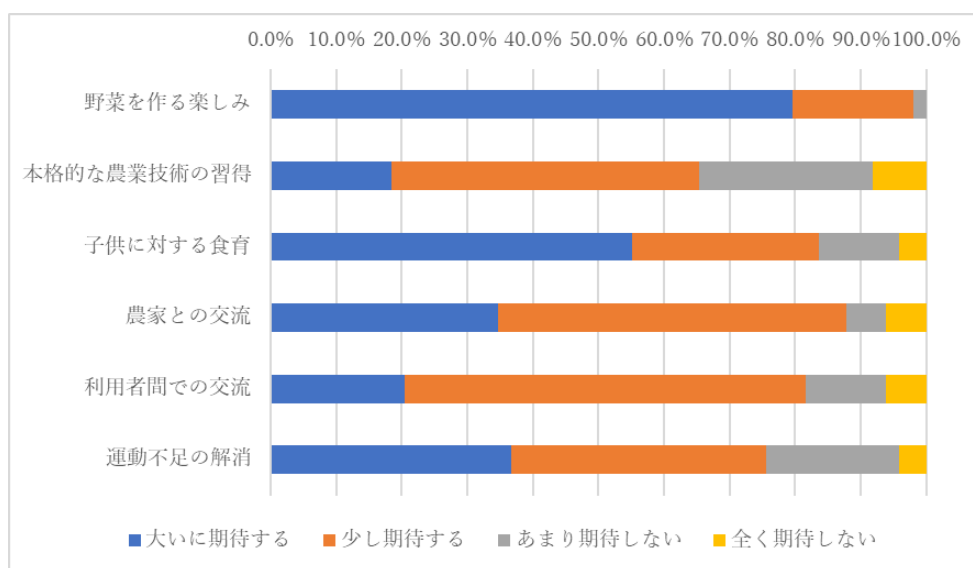
図6 農業体験農園の1月当たりの希望利用料金 (n=40)



最後に、農業体験農園に期待することについて把握しました (図7)。最も大きな期待を寄せられたのが、「野菜を作る楽しみ」です。野菜作りを余暇活動として、取り組みたいというニーズがあることが伺えます。次いで、食育に期待する声も多く聞かれました。

回答者の中には、子育て層の方も多くみられました。子供連れでも参加しやすい農園づくりが求められていると考えられます。

図7 農業体験農園に期待すること (n=49)



4 考 察

本研究を通して、盛岡市市民についても農業体験農園に対して一定の関心があることが明らかとなりました。

特に県外出身者の回答者は農業体験農園への関心が強く、こうした方々に周知することが利用者確保に重要だと思われます。

また、農業体験農園の内容については、夏野菜の栽培ニーズが強いこと、作業の指導や生産資材の準備はしてほしいが、ある程度自由に作物を決定したいというニーズが存在することが分かりました。

利用者による自由作付けについては、法的な面や、農園の運営的な面から課題も大きいですが、藤井（2018）にあるように、東京都練馬区の一部農園では、利用者に栽培したい作物のアンケートを取る事例も見られ、参考になると考えられます。

1月当たりの利用希望金額については、「理想価格」が2,619円という結果でしたが、回答者によって金額は大きく違いがみられました。

最後に、農業体験農園に対して、野菜を作る楽しみや食育などへの期待が強いことが明らかとなりました。

このことから、余暇や食育のために都市部の農地が利用できる意義は大きいと考えられます。

参考文献

- 藤井至・稲葉修武・藤田武弘（2018）「農業経営・交流の両面からみた農業体験農園の役割：東京都練馬区を事例として」『農業市場研究』27（1）：12-22.
- 稲葉修武・藤井至・藤田武弘（2017）「農業体験農園による利用者の農業理解への効果」『東北農業研究』70：119-120.
- 成清禎亮・川口進・佐藤弘（2014）『しあわせも収穫する農業体験農園』不知火書房.
- 坂口知子・大江靖雄（2003）「都市農業としての体験農園の経営的可能性－練馬区農業体験農園を事例として－」『農業経済研究別冊』108-113.
- 山田崇裕・門間敏幸（2006）「農業体験農園が利用者に及ぼす効果の解明－農業体験農園利用者の意識とその変化に基づいて－」『農業経営研究』44（1）：67-70.

あ と が き

これまで、農業体験農園は、東京都を始めとする大都市圏で取り組まれてきましたが、古館農業体験農園の取組状況と盛岡市市民の農業体験農園に関する意向調査結果をみると地方においても農業体験農園は、事業として成り立つ機運が高まってきていると考えられます。

盛岡市～花巻市のエリアでは、非農業従事者が既に94%に達しており、大都市圏とあまり変わらない状況になってきています。特に紫波町は、県内で最もベッドタウン化が進んでいて休日に農業に親しむという需要が期待できます。

農業地帯にある紫波町は、農業生産面では、新規就農者の確保にむけた野菜栽培のトレーニング農場としての役割や農業従事者の高齢化にともなう耕作放棄地の発生防止に効果が期待されます。

また消費者にとっては、子供の健康的な食生活のための食育や高齢者の生きがい対策として効果が期待されます。

ただ、現在の認定農業者は、自家の農業経営で忙しく、多くの労力を要する農業体験農園の設置運営は、なかなか難しい状況にあります。

このため、農業体験農園を設置運営する新たな運営主体が必要と考えられます。

古館農業体験農園の実践で運営側と参加者のコミュニティーが形成され、消費者の農業生産への理解が進んできた状況を踏まえると、最近注目されているCSA（Community Supported Agriculture）地域支援型農業へ展開が可能ではないかと考えられます。

野菜の定期購入、農業体験、消費者の農業生産・運営支援といったCSAの仕組みが構築できれば、農業体験農園は、よりビジネスとして成立しやすくなるとともに生産者と消費者の結びつきが、さらに強いコミュニティーが出来上がっていくと期待されます。

紫波町における農業体験農園は、古館農業体験農園が最初の取組となっていますので、今後、より農園の実施内容の充実が図られるとともに、同様の取組が町内に広がることを期待します。

産業政策監調査研究報告 第4号

古館農業体験農園の取組状況と盛岡市市民の農業体験農園の意向

執筆分担

はじめに、第1章 紫波町産業政策監 農村政策フェロー 小川勝弘

第2章 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
東北農業研究センター 稲葉修武

2020年12月発行

発行 岩手県紫波町 産業部 産業政策監

連絡先 〒028-3392 岩手県紫波郡紫波町紫波中央駅前二丁目3番地1
電話 019-672-2111 (代表)

紫波町ホームページ <https://www.town.shiwa.iwate.jp/>

本調査研究報告書の無断転用・使用はできません。本調査研究報告書の内容を使用する場合は、事前の許可が必要です。